



TITLE:

ニホンザル野外観察施設(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

加納, 隆至; 東, 滋; 渡辺, 邦夫; 足沢, 貞成; 山口, 直嗣;
冠地, 富士夫

CITATION:

加納, 隆至 ...[et al]. ニホンザル野外観察施設(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報 1993, 23: 37-40

ISSUE DATE:

1993-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164498>

RIGHT:

物たちの地球. 40: 124-125.

- 3) 相見満, 1992: 夜の森の道化師たち. ロリス類, ガラゴ類. 動物たちの地球, 41:150-154.
- 4) 相見満, 1992: サルを求めて1万キロ. 堀田満他編. スマトラの自然と人々. 98-113. 八坂書房, 東京.
- 5) 相見満, 1992: 学名の話(11) 新種を記載するには. モンキー, 242: 10-11.
- 6) 相見満, 1992: 学名の話(12) 出版物とは. モンキー, 243: 11-13.
- 7) 相見満, 1992: 学名の話(13) 動物命名規約と植物命名規約の違い. モンキー, 244: 12-14.
- 8) 相見満, 1992: スマトラのコノハザルの系統関係. 第8回日本霊長類学会学術大会予稿集. 18.
- 9) 相見満, 1992: 他の動物たちとの違い. 京都大学霊長類研究所編「サル学なんでも小事典」. 26-30. 講談社, 東京.
- 10) 相見満, 1992: ニホンザルのきた道. 京都大学霊長類研究所編「サル学なんでも小事典」. 205-210. 講談社, 東京.
- 11) 相見満, 1992: スマトラのコノハザルの系統関係. 霊長類研究, 8: 184.
- 12) 相見満, 1992: 学名の話(14) サルの新種はまだまだ見つかる. モンキー, 245・246: 22-23.
- 13) 瀬戸口烈司, 1991: 自由な思考と進化論. UP, 20-12(東京大学出版会): 21-25.
- 14) 瀬戸口烈司, 1992: 類人猿からホモ・サピエンスへ: 人類はいつ誕生したのか. 『最新大進化論』, 最新科学論シリーズ, 18: 88-99.
- 15) 瀬戸口烈司, 1992: 幻の人類祖先発見史: 「ミッシング・リンク」を探す. 『最新大進化論』, 最新科学論シリーズ, 18: 100-103.
- 16) 瀬戸口烈司, 1992: 夢あふれる新発見. 新版中学国語3. 教育出版, 東京: 78-84.
- 17) 瀬戸口烈司, 1992: 恐竜行動学入門. アニマ, No. 240 (9.1992): 18-27.
- 18) 瀬戸口烈司, 1992: 日本でも見つかった中生代のトリボスフェニック型臼歯. 歯界展望, 80: 861-870.
- 19) 瀬戸口烈司, 1992: 日本でも見つかった中生代の哺乳類化石. モンキー, 244: 18-20.
- 20) 瀬戸口烈司, 原田恵一, 大野照文, 1993:

「メトセラの軌跡—生きた化石と大量絶滅」(訳, ピーター・D・ウォード著), 青土社, 東京.

- 21) 瀬戸口烈司, 1993: アジアの有袋類はどこから来たのか: 中国やタイで発見された化石をめぐって. アニマ, No. 246 (3.1993): 39-42.

ニホンザル野外観察施設

加納隆至(施設長・兼)・東 滋・渡辺邦夫・足沢貞成¹⁾・山口直嗣²⁾・冠地富士夫³⁾

本施設の運営は上記3教官のほか, 鈴木 晃・山極寿一によって進められた。平成4年度の各ステーションの状況は次の通りである。

1. 幸島観察所

幸島の群れは昭和23年以來の蓄積された資料をもとに野外観察施設の中では独自の位置を占めている。今年度早々に, 10年余り主群のボスであったゲシが死亡し, マキグループのボスであるゲバも死亡して, 群れの若返りが進んでいる。主群のボスになったのはノソ(25才)であり, 第2位のオスがミミズ(21才)であり, 20才以上の個体はこの2頭のみである。今年も春から夏にかけて, 島が堆積した砂によって地続きになり, サル番を出す日が多かった。秋に台風がきてこの状態は解消されたが, こうした状態はほぼ毎年のことになっている。一方で対岸に船溜りの整備が進んでおり, 今後も目が離せない。また観察施設東側の小高い丘の上に「ビジターセンター」の建設が決まり, 取り付け道路の工事が行なわれた。リゾート構想による観光地化が進んでおり, 今後の対策が望まれている。平成5年3月の時点での島内の個体数はマキグループ13頭を含め91頭であり, この20年近くの間ほとんど変化していない。今年度の出産は10頭であり, うち4頭が死亡した。本年度2月末には, 和(日本獣医畜産大)や浜田(岡山理大)によって一斉捕獲調査が行なわれたが, この時点で7頭の妊娠が確認されている。

2. 下北研究林

平成4年度は, 12月と2月に佐井村地域を中心に, 従来のZ群由来の群れの数及びそれらの個体

1) 教務補佐員 2) 技官

数の調査をおこなった。群れの出現域はこの2年ほどの間に急激に広がって、車をフルに稼動する調査となった。調査対象域は、材木川、原田川、古佐井川、焼山沢、大佐井川、長後川、釜沢、福浦川であった。

その結果、3集団が観察され、追跡の結果、足跡の数で、Z₁群18頭、Z₂群52頭、Z₃群(Y群か?)43頭であった。上記の区域内にはこの3群の他にはいなかったと断言できよう。

ただし、釜沢や福浦川には現れる群れと、これら3群とのつながり、即ち前者独自のもののなかのどうかはなおはっきりさせえなかった。

この佐井村地域にも最近群れが畑に出て来るようになり、同教育委員会のスタッフは熱心に様々な側面から対応している。今年度の調査は、個々に出て来る群れが、どの群れなのかを明らかにすることによって、同委に協力するものでもあった。

3. 上信越研究林

1998年の冬期オリンピック開催地が長野に決定したことをうけて、研究林周辺地域でもいろいろな動きがおこってきている。そうした中で、今年度も雑魚川流域の調査が続行されたが、群れの所在を発見することはできなかった。ここ10年来の環境変化もあり、行動域に大きな変化がおこっている可能性がある。しかし、研究所内の人員配置上の問題などから、十分な追跡調査が行なえていない。そのような現状に基づいて、今後の経過を注意深く見守っていくための計画が話し合われた。

4. 木曽研究林

木曽研究林内のニホンザル群は、いずれも農作物への被害をもたらしているために、どの群れもこれまで部分的に捕獲された経験を持っている。それにもかかわらず、昭和56年当時と同じ数の群れが地域内に存在し、なおかつ部分的に分布域を広げている。こうした現状から調査に多少困難が伴うようになっており、なんらかの抜本的対策が必要になってきている。本年度も、猿害と捕獲、遊動域の拡大といった全国の野生ニホンザルが抱えている問題について、集中した調査が行なわれた。

5. 屋久島研究林

共同利用研究で、野間直彦(京大・生態研)が「ヤクシマザル生息地の森林の果実生産とフェノロジーに関する研究」、古市剛史(明治学院大)が「ニホンザルのオスの集団間移籍と繁殖戦略」、

大竹勝(日本モンキーセンター)が「糞分析によるヤクザルの高度差による食性の比較研究」、好広真一(龍谷大・経営)が「屋久島下部域のニホンザルの分布」についての研究をおこなった。

また、杉浦直樹(東大・理)、田中俊明(日大)が、ヤクザルの音声コミュニケーションについての研究をおこなった。また、林進、伊藤栄一、兼田明寿(岐大・農)が前岳部分での2次林の植生調査をおこなった。

鹿児島県(森林保全課)から、鹿児島大農学部への委託により「猿害地のヤクザルの生息実態調査(第2年次)」が、好広真一(龍谷大学・経営)・高畑由起夫(京大・理)・古市剛史(明治学院大)らを中心に多数のボランティアの協力によっておこなわれた。

研究概要

A) ニホンザルの社会生態学的、とくに自然群の環境利用と個体群の構造

東 滋・足沢貞成

ニホンザルの群れの連続した分布をゆるす環境で、遊動する群れが示す生活と社会環境をとらえ、生存に必要な条件をあきらかにするため、屋久島と下北半島西部の地域個体数について継続的な調査を行っている。

B) 福井県若狭地方及び木曽研究林における野生ニホンザル個体群の動態

東 滋・渡辺邦夫

福井県若狭地方と長野県木曽研究林地域において、最近の野生ニホンザルの動態に関する調査を行なった。

C) 熱帯降雨林の霊長類の群集生態学

東 滋

同所的に生息する数種の霊長類について種間関係、個体群構造、資源利用などに関して比較社会生態学研究を行い、community 構造のなりたちを考える。

E) 熱帯多雨林の山火事後の回復過程に関する生態学的研究

東 滋

森林回復の過程でカリマンタンクタイ国立公園の山火事後の、霊長類を含む果実食性哺乳類の群集の消長、彼らが森林の回復にはたす種子運搬者としての役割などを調べている。

E) 幸島のサルの生態学的社会学的研究

渡辺邦夫・山口直嗣^{a)}・冠地富士男^{a)}

従来からの継続として、ポピュレーション動態に関する資料を収集し、各月毎にほぼ全個体の体重を測定している。また集団内でおこったトピカルな出来事や通年の変化について分析を進めている。

F) 全国のニホンザル個体群に関するデータベースの作成

渡辺邦夫

全国の野生ニホンザル生息状況についてのデータベース作成を進めている。今年度はこれまで行なわれたニホンザルについての野外研究文献リストを作成し、出版のための準備を進めている。

II) スラウェシマカクの種分化と雑種形成に関する研究

渡辺邦夫

インドネシアのスラウェシ島において、トンキアンモンキーとヘックモンキー間の種間交雑地帯で総合調査を行なった。特に種間雑種群を捕獲したうえで、その形態特徴と地域変異とについて分析した。

I) 下北半島西北部の群れの遊動に関する研究

足沢貞成

下北西北域のM, I, Z各群ともニホンザルでは有数の広大な遊動域をもつ。その生態学的条件や個体群内部の構造などに焦点を当てて調査を続けている。

研究業績

論文

—英文—

- 1) Kawai, M., Watanabe, K., and Mori, A.(1992): Pre-cultural behaviors observed in free-ranging Japanese monkeys on Koshima Islet over the past 25 years. Primate Report, 32:143-153.

報告・その他

—和文—

- 1) 東 滋(1992): サルの世界4.グリーンパワー, 4月号
- 2) 東 滋(1992): サルの世界5.グリーンパワー,

2) 技官

5月号

- 3) 東 滋(1992): サルの世界6.グリーンパワー, 6月号
- 4) 東 滋(1992): 国割岳西斜面のヤクザル個体群の地域構造. 1992年度西部林道モニタリング調査サル班報告.
- 5) 渡辺邦夫(1992): スラウェシのメガネザル. 週刊朝日百科「動物たちの地球」, 8:155.
- 6) 渡辺邦夫(1992): ボルネオのマングローブ林とテングザル. 週刊朝日百科「動物たちの地球」, 8:219.
- 7) 渡辺邦夫(1992): コロブスの仲間たち. 週刊朝日百科「動物たちの地球」, 8:220-221.
- 8) 渡辺邦夫(1992): 雑種をつくるのは各自の自由?。「サル学なんでも小事典」(京都大学霊長類研究所編), pp.98-101, 講談社.
- 9) 渡辺邦夫(1992): 石を投げるサル. モンキー, 245/246:43.

学会発表

—英文—

- 1) Watanabe, K.(1992): Precultural behavior of Japanese macaques; Longitudinal studies of the Koshima troops. NATO-Advanced Study Institute, "The Ethological Roots of Culture", Cortona (Italy), June 21-July 3, 1992.
- 2) Watanabe, K. (1992): Reproductive deficiency of the hybrid monkeys between *Macaca tonkeana* and *M. hecki*; A possible example of hybrid sink. XIVth Congr.Intl. Primatol. Soc., Abstract, p.171.
- 3) Matsumura, S., and Watanabe, K. (1992): Sexual behavior and female reproductive cycle in a wild group of moor macaques. XIVth Congr. Intl. Primatol. Soc., Abstract, p.326.
- 4) Watanabe, K., Matsumura, S., and Bynum, N.(1992): Field Observation of Sulawesi macaques. XIVth Congr.Intl. Primatol. Soc., Abstract, p.380.

—和文—

- 1) 東 滋, 増井憲一, 高畑由起夫(1992): ヤクザルの生命表. 霊長類研究, 8(2):204.
- 2) 川本芳, 東滋, 庄武孝義, 島田誠, 吾妻健

(1992): ニホンザルのミトコンドリアDNAの地域分化. 霊長類研究, 8(2):214.

- 3) 渡辺邦夫(1992): 老化-幸島群のニホンザルを対象に. 第37回プリマテス研究会, 1992年12月12-13日.
- 4) 浜田穰, 渡辺毅, 渡辺邦夫(1992): 中央スラウェシに見られる自然交雑マカク個体に関する形態学的研究. 第46回日本人類学会・日本民族学会連合大会, 1992年10月24-25日.

サル類保健飼育管理施設

小嶋祥三(施設長・兼)・松林清明・
後藤俊二・鈴木樹理・松林伸子¹⁾

平成4年度の施設の概況は以下のようである。

1) サル類遠隔監視システムの予算化がなされ、放飼場を中心にTVカメラによる常時監視、録画が行われるようになった。また、外部からの侵入に備えて飼育室関係のカギの設備が更新され、水銀灯による照明も強化されたほか、夜間の接近者を感知して作動するアラームライトも増設された。チンパンジー区域では、電気錠とコンピューターを組み合わせた入退舎管理システムを設置し、通路の赤外線警報装置や周囲塀の高圧電柵と合わせ、幾重もの脱走防止策が施された。このようにガードが厳重になったことは、所員にとっては煩わしさを増し、放飼場の動物は休日に寝室に閉じこめられるなど、マイナスだらけの結果をもたらすのであるが、動物愛護に関する無分別な行動が存在する以上、止むを得ない措置である。貴重な予算を、このような対策ではなく、もっと動物の環境を豊かにするための施策に使える日が早く来ることを願わずにいられない。

2) 共同利用事業を充実させる目的で、サルの所外供給の試行を始めることが計画され、具体案が作られた。公的機関による飼育下繁殖サルの供給システムのモデルを作り、更に、実験用サルの適切な使い方を所外にも拡げてゆく機会になるよう、細かい検討が進められている。尚、この試行を本格化させ、更に、休日ケアを含む所内サル飼育の一元化や繁殖コロニーの所外移転、ウィルス検査機能の整備など、サルの飼育・繁殖・管理を大巾にレベルアップすることをめざして、センター化構想を進めようとしている。

研究概要

A) サル類の生殖生物学的研究

松林清明

老化に伴う生殖機能の変化を調べるため、特にオスのマカクで組織学的検索を行った。また、精子活性の年令的・季節的变化を見る手段として、ハムスター卵への侵入能力の評価を検討している。

B) 実験用サルの動物福祉の研究

松林清明

まず、科学的な評価を行う方法の開発をめざし、ケージサイズの違いによる行動特性の変化を解析できる実験システムを試作している。

C) サル類の花粉アレルギーに関する研究

後藤俊二

ニホンザルにおけるスギ花粉症の自然発症を明らかにするため、血中IgE抗体価や皮内アレルギー反応等を指標とした疫学調査を進めた。また、スギ花粉抗原の人工感作による花粉アレルギーの実験モデルを試みた。

D) サル類の成長の生理学的及び形態学的研究

鈴木樹理

サル類の血中成長ホルモンの分泌動態を明らかにするために、ニホンザルとアカゲザルについて、連続採血並びに検尿を行なった。実験終了回復後、生体計測を行ない形態学的データを得た。これら成長ホルモンのデータと生体計測データを合わせて成長の解析を行なった。

E) サル類のストレス定量のための基礎的研究

鈴木樹理

日常的にサル類に負荷されている様々なストレスを定量するための基礎研究として、血中のリンパ球サブセットの割合およびNK活性を定量し、これらの日内変動について調べた。

論文

—英文—

- 1) Matsubayashi, K., Gotoh, S., Suzuki, J., Takenaka, O., Mukai, R., Narita, T., Kobayashi, R., Fujimoto, K., Takasaka, M. and Honjo, S. (1992): Viral infection in captive and free-ranging Japanese monkey troops. In: Topics in primatology, 3, (eds. by Matano, S., Tuttle, R.H., Ishida, H. and Goodman, M.) pp.391-397, University of Tokyo Press, Tokyo.